

地域を創る

四国を拓く

379

環境への関心高める

昆虫、鳥類、植物など県内の自然関係の研究者らで組織するNPO法人「みんなでつくる自然史博物館・香川」(館長・末広喜代一香川大名養教授)。山間部の旧中学校の校舎を拠点に、自然保護の大切さを県民に伝えている。

発足は2008年。自然史博物館が存在しない県内で、建設機運を高めるとともに、研究や教育など博物館のソフト面の機能を担っていくこと、県みどり保全課が事務局となって立ち上がった。その後独立した組織となり、現在はまんのう町中通のことなみ未来館(旧琴南中学校)の3階に事務局を置く。

活動の大きな柱は、環境保全に向けた啓発活動

みんなでつくる自然史博物館・香川 まんのう町



標本展の準備のために集まった会員たち＝丸亀市内

だ。標本などの常設展示や県内各所での企画展を開催するほか、自然観察会への講師派遣、会員の

県レッドデータブック

の改訂時には、希少生物の調査に各分野の会員たちがフル活動。また県民から「珍しい生き物がいた」との連絡があれば、その専門家に直ちに相談し回答する。分野を超えた研究者のネットワークを武器に、生物多様性や環境保全への県民の関心を高めている。

次世代育成にも力を入れる。中学校・高校で生物部が減ってきていることを受け、22年に学生会員を対象にした生物部をスタート。昆虫採集合宿やピオトープ作りといった行事を企画するだけでなく、絶滅の恐れがある生物を発見、国際会議でポスター発表する部員も現れた。

ソフト面での活動を広げてきた一方、ハード面

では課題を抱えたままだ。21年にまんのうに拠点を構えるまでは、標本などの資料を保存する場所が全くなかった。現在もあくまで旧校舎の一角に過ぎず、他県の博物館のような十分な収蔵施設とは言えない。個人研究者が高齢化し、資料散逸の恐れは増している。

「自然の移り変わりや変化を知り、どう生きていくかを考えるのが自然史で、標本はそのための重要な証拠品」と強調する事務局の松本慶一さん(54)。「草の根活動を続けて少しずつ組織の認知度を上げ、未来の研究者たちも育てていく。その延長で、いつか自然史博物館が実現したら」と話している。

＝随時掲載＝



【メモ】「自然史博物館」の事務局と常設展示室などは、旧中学校の理科室や準備室を転用したもの。展示室の開館は毎週土曜日(年末年始を除く)午前10時～午後4時で、幅広い年代の生き物好きが集まるサロンにもなっている。会員数は10月末時点で145個人・団体。ホームページは<https://www.kc-nmh.org>もある。問い合わせは事務局へ070(4073)0989。

西エリア

丸亀・坂出・善通寺・観音寺・三豊・宇多津・綾川・琴平・多